

日本語助詞「へ」

一他の空間助詞及び接続する動詞の特性との関係一

発達教育科学専攻 日本語教育領域

鎌田真優

キーワード：助詞へ、動詞の特性、限界性、移動性、方向性、空間助詞、機能、意味、通時的

1. はじめに

1.1. 研究の背景

多くの先行研究により、助詞「へ」は平安初期に成立したことが言われており（杉井 1954、此島 1966）、また当時は「言語主体の現在位置から遠く離れている地点へ向かって進んでゆく」という意味を持っていたということが明らかにされている（青木 1956）。

しかし現代の助詞「へ」が意味を持ち、全く同じ用法で用いられている事実はなく、『日本国語大辞典』（小学館）では、他に、動作・作用の帰着点、動作・作用の及ぶ対象・方向を示す、動作の行われる場所を示す、という3つの用法があると記されている。そしてこれらの用法は時代とともに獲得、同時に「へ」の勢力が増し、現代では「に」をしのぐという記述までされている。しかし実際の言語生活においては、小林（2004）や山西・駒走（2005）の述べているように、「に」をしのぐ数的優勢は失われていると思われる。

また、意味に関しては一般的に日本語の助詞「へ」は移動性の動詞が後接するとき、「方向」「目標」を表すと言われている。よく似た意味を持つ助詞として助詞「に」が挙げられ、「に」と同様に「着点」も表すとしている辞書や文法書もある。さまざまな辞書や文法書で、助詞「へ」の用法や意味について述べられているが、助詞「へ」の成立から現代までに起こった用法の変化により、実際の助詞「へ」の使われ方の現状に合致した用法や、助詞自体の機能、意味を明確に述べるのが難しく、さらに「に」などの他の

助詞との用法の干渉が起こることもあり、それらとの用法の違いを語感で説明するにとどまってしまっている。

1.2. 研究の目的

本稿は、助詞「へ」において、辞書などの記述で見られる動詞や名詞との関係から語られる用法だけではなく、他の空間を表す助詞の機能・意味との関係や、助詞に後接する動詞の特性と用法の拡大の関係から、助詞「へ」の機能や意味を明らかにしていくことが目的である。さらに、他の空間助詞との関係で見えた助詞「へ」の機能・意味を、後接する動詞の特性と用法の拡大と関連付けて解釈することにより、現代の助詞「へ」の用法の説明において起こりうる、助詞「へ」の本来の意味とは何でいくつあるのか、他の助詞との干渉はどういった違いから起こっているのかという問題を説明する一方法を示すことである。

2. 動詞の特性について

本稿において、助詞「へ」と他の空間を表す助詞との比較や、「へ」の通時的な用法拡大と機能・意味との関係を考察するにあたり、両者に深く関わるのが助詞に後接する動詞の特性である。その動詞の特性として、「限界性」、「移動性」、「方向性」の3つをとり上げる。先行研究等をもとにこれら3つの特性の定義づけを行い動詞を分類する。それぞれに属する動詞の例は以下のとおりである。

表 1 3つの特性による動詞の分類

方向性	移動性	限界性	動詞の例
あり	あり	限界	行く、着く、出る…
		無限界	進む、登る、向かう…
	なし	限界	上げる、向く、送る…
		無限界	話す、示す、乞う…
なし	あり	限界	運ぶ、曲る（動作）
		無限界	走る、飛ぶ、巡る…
	なし	限界	立つ、置く、消える…
		無限界	いる、思う、書く…

3. 助詞「へ」と他の空間助詞との比較

田中（1997）や矢澤・橋本（1998）、岡田（2009）をもとに、本稿における助詞の「用法」、「機能」、「意味」の定義づけを行う。そして助詞「へ」と比較する助詞として、空間助詞「から」、「まで」、「を」、「に」を取り上げて分析を進めていく。分析観点は「助詞の機能」、「助詞の意味と構文の影響」、「後接する動詞（語）の特性との関係」で、分析資料はコーパス検索アプリケーション「中納言」の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」と「日本語話し言葉コーパス」の例文を用いて行う。

空間助詞を機能と意味から見たとき、以下の2つのグループに分類できる。また、助詞「へ」を含む空間助詞「から」、「まで」、「を」、「に」の機能と意味を表にまとめる。

表 2 空間助詞の機能・意味

グループ	空間助詞	機能	助詞自体の文法的意味	構文全体で規定される意味	空間助詞ではない場合の意味	その他
I	へ	前接する名詞を移動動作の方向（先）として捉える。動作の進展する方向のみを瞬間的に切り取る。	<方向> <方向先>		空間助詞としての意味が、助詞自体の意味と一致している。	助詞「に」の機能の代用
	から	前接する名詞を動作の発生する地点や出所と捉える。動作・作用の始まりの局面を切り取り、そこから進展する経路・コースが意識させる。	<開始> <起点> <出所>			
II	まで	前接する名詞を動作の到達点・限界点と捉える。到達点に至るまで進展してきた経路・コースが意識され、終わりの局面を切り取る。	<終了> <到達点> <限界点>			文法格：対格
	を	前接する名詞を動作が作用する対象として捉える		<経路> <場所> <起点> <通過点>	<対象>	
	に	前接する名詞を対象指定し、動詞的チャンクに差し向ける		<方向先> <場所> <着点>	<モノ>	文法格：与格 交渉がある助詞に対して無標である。

グループ I. 助詞自体に文法的意味を持っている助詞

グループ II. 助詞自体には文法的意味がない助詞

動詞の語彙的な意味や構文全体で意味が付与される助詞

4. 助詞「へ」の通時的研究

前章までは、助詞「へ」の機能や意味について空間助詞との比較、動詞の特性との関係により述べてきた。また、助詞「へ」による「に」の機能の代用や助詞「へ」と「に」の混用と機能のはたらきの違いが、「へ」の用法拡大と接続する動詞の特性の通時変化と大きく関わっていると考えている。

それらを言及するにあたり、助詞「へ」の成立の過程や成立後の用法の変化、拡大に関する先行研究より、各時代の助詞「へ」の用法や意味についてまとめ、助詞「へ」の通時的な変化について述べる。また助詞「へ」と「に」の用例数や接続する動詞の語に関する調査を行い、動詞の語数の増加が「へ」の用法の拡大と関係していることを示し現代の助詞「へ」の用法を暫定的に示していく。

助詞「へ」の成立以前から室町時代までは石垣（1955）、青木（1956）、杉井（1954）、此島（1966）等の先行研究や調査をもとにした分析を行い、江戸時代以降から現代までは、筆者による文献調査をもとに分析を行う。

青木（1956）の調査では平安中期から助詞「へ」の用法拡大が始まり鎌倉中期以降もその拡大が広がっていたことが、グラフにより示されており、此島（1966）では、室町当時は現代よりも用法が広いのではないかという考えが示されている。

江戸時代以降の文献調査では、前期（京阪語）では助詞「に」に比べ助詞「へ」の本来の用法である①遠く離れた地点へ進みゆく移動動作の目標を示す用法や成立間もなく発生した②進み近づく移動動作の目標を示す用法の優勢が一定に保たれていないことが分かった。後期（江戸語）では、一番成立年が古い文献を除いては助詞「へ」の優勢が一定して保たれており、接続する動詞の種類も増加している。本調査による資料だけでは正確なことは言えないが、江戸前期まで文化の形成地であった京阪では助詞「へ」の用法拡大は終わり、室町時代に見られた助詞「へ」の優勢

状態は保たれていない。一方中央の言語・文化において伝播が遅れる江戸では助詞「へ」がそのまま広く使われ続けていて、それが、後期江戸の文献に反映されているのではないだろうか。

近代に入ると助詞「へ」の用例数の優勢は戦後辺りまで続き、その後「に」が上回るようになってきたが、用例数のみが減少し、用法の自由さは保たれたままである。

現代の調査は、コーパス検索アプリケーション中納言の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」と「日本語話し言葉コーパス」による助詞「へ」の用例数の調査を行う。件数からは、書き言葉コーパス、話し言葉コーパスの両方において助詞「へ」は助詞「に」に比べて少ないということが分かった。用例の内容では、

書き言葉コーパスは、助詞「へ」で文が終わっている用例が 157 件、接続助詞的に用いられる用法が 11 件見られた。一方話し言葉コーパスでは、助詞「へ」で文が終わる用法は 4 件、接続助詞的用法は 0 件であった。その他にも書き言葉と話し言葉の間では、助詞「へ」の用法に異なる特徴が見られ、用法の縮小としては話し言葉の方が進んでいると考えられる。

5. 助詞「へ」に後接する動詞の特性の通時的変遷

通時的な研究から、助詞「へ」の用法拡大とは前接する名詞や後接する動詞の種類が増加のことであるということが出来る。用法拡大とともに接続するようになった動詞は特性に変化が見られ、その動詞の特性の変遷が現代用いられる助詞「へ」の機能や意味に深く関係していると考えられる。

本章の調査では助詞「へ」の用法拡大過程ごとに後接する動詞を取り上げ、動詞の3つの特性「限界性」、「移動性」、「方向性」で分類し、その時代に助詞「へ」に接続する動詞の特性がどのように変化したかを通時的に観察する。

以下の表では、特性ごとに動詞をグループに分け、その時代の用法として接続するようになった動詞が含まれているグループを「確立」、次の代で用例数が増えて確立になる動詞を含むグループを「萌芽」、わずかな用例数で現れ、確立に結び付くには遠い動詞のグループを「出現」としてあらわす。

出現 萌芽 確立

5.1. 上代から平安初期

この時期の助詞「へ」は、言語主体から遠くにある広い場所の名詞が前接し、後接する動詞が特性として移動性・方向性を持っているという、かなり制限された環境で用いられている。この時期の助詞「へ」は〈方向〉というまだ文法的意味を持っていない、助詞「に」や「を」と同じように構文全体から〈現在地点から離れた地点へ〉進みゆく移動動作の方向〉の意味が規定される助詞であったと考えられる。

表 3 助詞「へ」成立までの「へ」に後接する動詞の特性の変化

方向性	移動性	限界性	上代	平安初期
なし	あり	限界		
		無限界		
	なし	限界		
		無限界		
あり	あり	限界		
		無限界		
	なし	限界		
		無限界		

5.2. 平安中期以降から室町時代

用法が拡大してきた当初から、助詞「へ」に後接する動詞の種類が増加により、名詞も場所だけでなく物や人も増えている。そしてそれらの名詞は一貫して動作や作用の向かう先になっている。つまり、助詞が場所に限らず物、人などの名詞に関係なく接続し、動詞の語彙的意味に頼らず方向・方向先を示すことができるようになったと言える。助詞「へ」は鎌倉中期以降室町時代に助詞自体の文法的意味として、動詞の動作・作用が向かう〈方向（先）〉の意味を獲得したのである。

表 4 平安中期以降から室町時代までの「へ」に後接する動詞の特性の変化

方向性	移動性	限界性	平安中期以降	院政期以降	鎌倉初期	鎌倉中期以降	室町
なし	あり	限界					
		無限界					
	なし	限界					
		無限界					
あり	あり	限界					
		無限界					
	なし	限界					
		無限界					

5.3. 江戸時代から現代まで

江戸後期にもこのような例は見られた移動性と方向性のない動詞の用例が、近代に入るとその種類と数が格段と上がり本来ならば「に」で表すべきであり到底「へ」では

許容できないものも出現する。現代でも残る助詞「へ」、「に」の混用のはじまりが見られる。

表 5 江戸時代から現代までの「へ」に後接する動詞の特性の変化

方向性	移動性	限界性	江戸前期	江戸後期	近代以降	現代
なし	あり	限界				
		無限界				
	なし	限界				
		無限界				
あり	あり	限界				
		無限界				
	なし	限界				
		無限界				

これらの用例は、助詞「へ」に<方向>以外の意味があるのではないかと考えてしまう一つの要因である。「場所」や「人」、「モノ」を指す拡大後の用法は、助詞「に」と大変似ているため<方向>や<方向先>を意味していた「へ」が、次第に「に」の用法に引き寄せられて<方向>の先の接点だけに焦点があたった結果、助詞「に」の「名詞を対象指定し、動詞的チャンクに差し向ける」機能の代用として機能するようになった。それにより、助詞「に」が本来つくはずのところ「へ」が使われるような混用が起こったり、様々な辞書や文法書に挙げられている<方向(先)>以外の意味があると感じたりするのではないだろうか。しかしこの「名詞を対象指定し、動詞的チャンクに差し向ける」という機能は本来「に」の機能であり、あくまで「へ」による「に」の機能の代用であると考えられる。

6. まとめ

助詞「へ」は空間助詞の機能や意味との比較で、空間を表す助詞の中では、構造表示の助詞ではなく、文法的意味<方向(先)>をもち、「前接する名詞を移動動作の方向(先)機として捉える機能と、動作の進展する方向を瞬間的に切り取る機能があることを述べた。さらに、通時的研究と助詞に後接する動詞の特性との関係から、「へ」が通時的な用法拡大の過程で文法的意味を持った現代の助詞「へ」になったことと、その用法拡大の影響で助詞「に」の機能を代用するようになった結果、現代の助詞「へ」が様々な用法や意味を解釈しえる助詞になっていることを明らかにした。以下本稿の考察をまとめる。

- (1) 助詞「へ」の機能は「前接する名詞を動作・作用の方向(先)」として捉える。動作の進展する方向のみを瞬間的に切り取る。
- (2) 文法的意味は<方向(先)>である。

- (3) 助詞「へ」は、発生当時は動詞の特性や、前接する名詞などの構文全体で<言語主体の現在地点から遠く離れた地点へ向かっていく>意味であったが、用法拡大とともに助詞自体の文法的意味として<方向(先)>を持つようになった。
- (4) 用法が拡大していく中で、助詞「に」の機能の代用で使われるようになった。「へ」が「に」の代用として用いられているとき、前接する名詞を対象として指定し、動詞チャンクに差し向けて関連付け、それらの結びつきより<場所><着点><モノ>の意味が加わる。
- (5) 現代の助詞「へ」の用法は、成立当初と同じ移動性と方向性がある限界動詞との結びつきがかなり強いが、書き言葉と話し言葉で若干の差が見られる。話し言葉においては、「に」の代用用法を無視すれば、「へ」成立当初とほぼ同じように用いられている。書き言葉では、助詞「へ」自体の<方向>の意味が強く出ていて、方向性のない動詞が接続したり、何も続かなかつたりしても<方向>を示している。

主な参考文献

- 青木伶子 (1956) 「へ」と「に」の消長『国語学』第 24 号, 107-120
- 石垣謙二 (1955) 「助詞「へ」の通時的考察」『助詞の歴史的研究』岩波書店
- 杉井鈴子 (1954) 「助詞への成立」『国語学』第 19 号, 42-54
- 岡田幸彦 (2009) 「現代日本語の移動動詞と場所名詞の格」『日本アジア研究』第 6 号, 39-61
- 小林隆 (2004) 『方言学的日本史の方法』ひつじ書房
- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究』桜楓社
- 田中茂範 (1997) 「第 I 部 空間表現の意味・機能」田中茂範・松本曜『日英後比較選書 6 空間と移動の表現』第 1 部, 研究者出版, 1-124
- 矢澤真人・橋本修 (1998) 「特集 近代語の語法の変化—『坊ちゃん』の表現を題材に—」『日本語学』第 17 号, 第 6 巻, 明治書院, 13-21
- 山西正子・駒走昭二 (2005) 「格助詞「へ」と「に」の分担領域—時間と空間—」『目白大学文学・言語学研究』第 1 号, 49-66